

傳藤原行成 伊豫切 下



0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 5m  
30 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5

始



傳藤原行成書

# 伊豫切

(和漢朗詠集)

釋文

下

（詩文內容）

釋文

立秋

蕭颯涼風興衰髮誰教計會一時秋。

鶴漸散間秋色少鯉常趨處晚聲微。

あ  
支  
ノ  
段  
セ  
ル  
は  
さ  
や  
可  
爾  
み  
え  
ね  
と  
无  
可  
せ  
の  
於  
と  
爾  
そ  
お  
と  
ろ  
可  
れ  
ぬ  
累  
放  
行

うち  
徒  
介  
爾  
も  
能  
そ  
可  
な  
し  
支  
こ  
の  
は

但喜暑隨三伏去不知秋送二毛來。白  
槐花雨潤新秋地桐葉風涼欲夜天。  
炎景剩殘衣尚重晚涼潛到簾先知。



あ支多ちてい久可もあらねとこのねぬ  
るあさ个の可せは多もとさむしも

七夕

憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多。白

二星適逢未叙別緒依々之恨、五夜將明頻

驚涼風颯々之聲。

露應別淚珠空落、雲是殘粧髮未成。菅

風從昨夜聲彌怨、露及明朝淚不禁。

去衣曳浪霞應濕、行燭浸流月欲消。菅三品

詞託微波雖且遣、心期片月欲爲媒。輔昭

あ万の可はと本支わ多りにあらねと无き  
み可ふ那てはとし爾こそまで人丸

一年爾一夜と於もへと多那者たの

あひみむあきの可支りな支可な貫之  
としこと爾あふとは春れと多那た  
のぬるよの可すそ須く那可利个る躬恒

秋興

林間煖酒燒紅葉、石上題詩拂綠苔。白  
楚思眇茫雲水冷、商聲清脆管絃秋。同  
大底四時心惄苦、就中腸斷是秋天。同  
物色自堪傷客意、宜將愁字作秋心。野  
由來感思在秋天、多被當時節物牽。  
第一傷心何處最、竹風鳴葉月明前。白  
蜀茶漸忘浮花味、楚練新傳擣雪聲。相如  
うつら那久い者れのゝへ能あ支はきを  
於もふひとゝ毛みつるけふ可那丹比國人

あ支はな本王ゆふまくれれ爾てしこそ多々なら  
ねを支のうは可せ者かきのしたつゆ少義孝

秋晚

相思夕上松臺立葦思蟬聲滿耳秋。  
望山幽月猶藏影聽砌飛泉轉倍聲。  
を久らやまふもとのへ能者の那すなき  
ほの可にみゆるあ支能ゆふ久れ

秋夜

秋夜長々々無睡天不明耿々殘燈背壁  
影蕭々暗雨打窓聲。  
遲々鐘漏初長夜耿々星河欲曙天。  
燕子樓中霜月夜秋來只爲一人長。  
蔓草露深人定後終霄雲盡月明前野。

蒹葭沙裏孤舟夢榆柳營頭万里心齊名  
あしひきのやまとり能ののした利のを  
能のな可かしよをひと利の可かもねむ人丸  
むつともまたつ支なく爾れあけ爾れ个利のい  
徒つらはあ支かのな可かしといふよは躬恒

十五夜付月

秦甸之一千餘里凜々永鋪漢家之三十  
六宮澄々粉飾。

織錦機中已辨相思之字擣衣砧上

俄添怨別之聲已上十五夜賦

三五夜中新月色二千里外故人心白  
嵩山表裏千里雪洛水高低兩顆珠白  
十二廻中無勝於此夕之好千万里外皆爭

於吾家之光。紀

碧浪金波三五初、秋風計會似空虛。  
自疑荷葉凝霜早、人導蘆花過雨餘。  
岸白還迷松上鶴、潭融可算藻中魚。  
瑤池便是尋常号、此夜清光玉不如。淳茂  
金膏一滴秋風露、玉匣三更冷漢雲。音三品  
楊貴妃歸唐帝思李夫人去漢皇情順  
みつ能於も爾てるつ支なみを可所ふ  
れ者こよひ曾あき能も那可な利个る

月

誰人隴外久征戍、何處庭前新別離。白  
秋水漲來船去速、夜雲收盡月行遲。野展那  
不醉黔中爭去得、磨圍山月正蒼々。

天山不辨何年雪、合浦應迷舊日珠。統理平  
欲和豐嶺鐘聲否、其奈華亭鶴警何。申書王  
鄉淚數行征戍客、棹歌一曲釣漁翁。保胤  
あまのはらふ利さけみれ者可須可な  
るみ可さのや万爾いてし徒支可も  
しらくも爾はねうち可者しとふ可  
利能可けさへみゆるあき能よのつ支  
よ爾ふれ者も能お无ふとしもなけれ  
ともつきにい久多ひな可めし徒らん

書王中

九日付菊

薦知社日辭巢去、菊爲重陽日雨開。季端  
採故事於漢武則赤萸插宮人之衣、  
尋舊跡於魏文亦黃花助彭祖之術。

先三遲兮吹其花如曉星之轉河漢  
引十分兮蕩其彩疑秋雪之迴洛川

谷水洗花汲下流而得上壽者三十餘  
家地脉和味浪日精而駐年顏者五

百箇歲已上紀  
わ可やとの支久能しらつゆけふことに  
いくよたまりてふちとなるらん中務

菊

霜蓬老鬢三分白露菊新花一半黃  
不是花中偏愛菊此花開後更無花

元  
嵐陰欲暮契松柏之後凋秋景早移嘲

芝蘭之先敗

紀發菊

鄆縣村閭皆潤屋陶家兒子不垂堂

善相公

蘭苑自慙爲俗骨槿籬不信有長生保胤  
蘭蕙苑嵐摧紫後蓬萊洞月照霜中音三品  
ひさ可たのくも能うへ爾てみるきくは  
あまつほしとそあやまたれける敏行  
こゝろあて爾をらはやをらんはつし  
も能於きまとはせるしら支く能者那躬恒

九月盡

縱以嶠峴爲固難留蕭瑟於雲衢縱令孟賁而追何遮爽籲於風境順

頭目縱隨禪客乞以秋施與太應難順

文峯按轡白駒景詞海艤舟紅葉聲以言  
やまさひしあ支も春支ぬとつくる可  
も万支のはこと爾於今るあさしも八束

久れてゆくあ支の可多み爾於くもの盤  
わ可もとゆひのしも爾所あり个る兼盛  
女郎花

花色如蒸粟、俗呼爲女郎、聞名戲欲

契借老、恐惡衰翁首似霜頭

をみ那へし於本可るのへ爾やとりせ  
はあやなくあ多の那をや多徒へ支野美材  
をみ那へし見る爾ころは那くさ万

ていとむ可しのあき所こひ志支清慎公

萩

曉露鹿鳴花始發、百般攀挿一時情。

あ支のゝに者支可るをのこなはを那  
美ねるやね利所の久多けて曾於もふ

し可能ねな可らうつしてし可那元輔

うつろはむこと多爾をし支あきは支

爾をれぬ者可利も於个るつゆ可那伊勢

あ支のゝ能者きのにしきをふるさと爾

し可能ねな可らうつしてし可那元輔

蘭

前頭更有蘆條物老菊衰蘭三兩叢白

扶桑豈無影乎、浮雲掩而忽昏、叢蘭

豈不芳乎、秋風吹而先敗。中書王

凝如鳳女顏施粉滴似鮫人眼泣珠都

曲驚楚客秋絃馥夢斷燕姬曉枕薰直幹

ぬしゝらぬ可こ所爾ほへれあきのゝに

多可ぬ支可けしふちは可万所も素性

權

松樹千年終是朽槿花一日自爲榮。白  
來而不留蘿蔓有拂晨之露去而

不返槿籬無後暮之花。頤文書王

於本つ可那多れと可しらむあ支利能た  
え万爾みゆるあさ可はの者那  
あさ可本を那爾は可那しと於も日今むひ  
とをもはな者い可みるらん道信少將

前栽

多見栽花悅目儕先時豫養待開遊。自

吾閑寂家僮倦春樹春栽秋草秋。音三品

閑思看汝花紅日正是當吾鬚白時。保胤

曾非種處思元亮爲是花時供世尊。種菊音

ち利を多爾春惠しとそもふうゑ  
しよりいもと利可ぬるとこなつ能者那躬恒  
者那爾よ利も能を所於もふしらつゆ  
能於く爾毛い可ゝならんと春らん

紅葉

不堪紅葉青苔地又是涼風暮雨天。白  
黃纈纈林寒有葉碧瑠璃水淨無風。白  
洞中清淺瑠璃水庭上蕭條錦鏽林。保胤  
外物獨醒松潤色餘波合力錦江聲。以言  
しらつゆもし久れもいたくもるやまは  
志多はのこら須いろつき爾け利貫之  
むらくの爾し支と所みるさほやまの  
は曾のもみち支利多ぬまは清正

落葉

三秋而宮漏正長、空階雨滴、万里而鄉園何在、落葉窓深。愁賦

城柳宮槐漫搖落、秋悲不到貴人之心。白秋庭不掃、携藤杖、閑踏梧桐黃葉行。  
梧桐影中一聲之雨空灑鷗鷺背上數片之紅纔殘。頤

樵蘇往反、杖穿朱買臣之衣、隱逸優

遊履踏葛稚仙之藥。相如

逐夜光多吳苑月、每朝聲少漢林風。後王書王中隨嵐落葉含蕭瑟、磯石飛泉弄雅琴。  
須可かはもみち者な可かるかつら支能の  
やまのあ支可かせふ支所とし久くらし入丸

可かみ那なつきし久くれととも爾るか美み那なひの  
もり能のこのははふ利爾りこそふれ  
みるひともなくてち利りぬる於久くやまの  
もみちはよるの二にし支きな利りける貢くわん之

鴈付歸雁

万里人南去、三秋鴈北飛、不知何歲月、  
得與汝同歸。文選

尋陽江色潮添滿、彭蠡秋聲鴈引來。劉禹錫  
四五朶山粧、雨色雨三行、鴈點雲秋。杜荀鶴  
虛弓難避、未拋疑於上弦之月懸、奔  
箭易迷、猶成誤於下流之水急。江相公  
鴈飛碧落書青紙、隼擊霜林破錦機。菅

雲衣范叙羈中贈。風櫓瀟湘浪上舟。後王書王中  
あき可せ爾者つ可利のね所支。この那  
多可た万つさをかゝてきつらん友則  
山腰歸雁斜牽帶、水面新虹未展巾。都在中  
者る可須み多つをみ春て、ゆ久可利  
はなゝ支さとにすみやならへる伊勢  
虫

切々暗窓下、嘆々深草中、秋天思婦心、  
雨夜愁人耳。白

霜草欲枯虫思苦、風枝未定鳥栖難。白  
床嫌短脚蛩聲閑、壁厭空心鼠孔穿。野  
山館雨時鳴自暗、野亭風處織猶寒。直幹

叢邊怨遠風聞暗、壁底吟幽月色寒。順  
いまこむと多れ多のめけむあき能よを  
あ可しかねつゝまつむし能なく  
支利／＼すい多くなゝ支所あ支能よの那  
き於もひはわれ所まされる素性

鹿

蒼苔路滑僧歸寺、紅葉聲乾鹿在林。溫庭筠  
暗遣食萃身色變、更隨加草德風來。白鹿  
もみちせぬと支はのやまにすむし  
可は於のれなきてやあ支をしるらん能宣  
ゆふつくよをくら能や万爾なくし可  
能こゑ能うちにやあ支は久るらん貫之

露

可憐九月初三夜、露似真珠月似弓。白  
露滴蘭叢寒玉白、風衡松葉雅琴清。英明  
さをし可のあさ多つをのゝあ支はき爾  
た万とみるまで於今るしらつゆ家持  
霧

竹霧曉籠衡嶺月蘋風暖送過江春。白  
雖愁夕霧埋人枕、猶愛朝雲出馬鞍。江相公  
可は支利能ふもとをこめてたちぬれ  
者所ら爾所あ支能やまはみえける深養父  
多可ための爾し支なれ八可あ支利能  
さほのや万へを多ち可くすらむ友則  
擣衣

八月九月正長夜千聲萬聲無丁時。白

北斗星前横旅雁、南樓月下擣寒衣。  
擣處曉愁聞月冷、裁將秋寄寒雲塞。萬茂  
裁出還迷長短製、邊愁定不告腰圍。直幹  
風底香飛雙袖舉、月前杵怨兩眉低。書王中  
年々別思驚秋雁、夜々幽聲到曉雞。同上  
可らころもう都こそ支け者つ支ゝよみ  
またねぬひとを曾ら爾しる可那貰之  
冬

初冬

十月江南天氣好、可憐冬景似春華。白  
四時牢落三分減、萬物蹉跎過半凋。御製頌  
床上卷收青竹簾、匣中開出自線衣。音  
可のみなつ支ふり美ふら須三さため那

きし久れ所ふゆの八しめな利<sup>け</sup>个る  
冬夜

一盞寒燈雲外夜數盃溫酌雪中春。白  
年光自向燈前盡客思唯從枕上生。尊敬  
於もひ可ねいも可りゆ今はふゆのよ  
能可者かせさむみちどりなくな利貫之  
歲暮

寒流帶月澄如鏡夕吹和霜利似刀。白  
風雲易向人前暮歲月難從老底還。良春  
ゆ久とし能をし久もある可那ま須  
可ゝみゝる可けさへ爾久れぬとおもへ盤<sup>は</sup>  
爐火

黃醅綠醑迎春熟絳帳紅爐逐夜開。白

看無野馬聽無鶯臘裏風光被火迎。音三品  
此火應鑽花樹取對來終夜有春情。同上  
多時縱醉鶯花下近日那離獸炭邊。同前  
うつみひのした爾可れしと支よ利  
も可くに久まるゝを利所わひ志支業平  
霜

三秋岸雪花初白一夜林霜葉盡紅。溫庭筠  
萬物秋霜能壞色四時冬日最凋年。白  
閨寒夢驚或添孤婦之砧上山深感動  
先侵四皓之鬢邊。青女司霜  
君子夜深音不警老翁年晚髮相驚。音  
聲々已斷華亭鶴步々初驚葛履人。音  
晨積瓦溝鶯變色夜零華表鶴吞聲。同前

よをさむみねさめて支々はをし所  
なくはらひもあへ須しもや於くらむ

雪

曉入梁王之苑。雪滿群山、夜登庾公之  
樓、月明千里。白賦。

銀河沙漲三千里、梅嶺花排一萬株。白  
雪似鶯毛飛散亂、人被鶯氅立徘徊。白

或逐風不返、如振群鶯之毛、亦當晴猶

殘、疑綴衆孤之腋。春雪賦

翅似得群柄浦鶯、心應乘興棹舟人。邑上御製

立於庭上頭爲鶯、坐在爐邊手不龜。晉班女聞中秋扇色、楚王臺上夜琴聲。尊敬

美やこ爾はめつらしとみるはつの支をよ

し能<sup>の</sup>や万爾<sup>に</sup>ふ利<sup>の</sup>やしぬらん  
みよしの<sup>の</sup>やま能<sup>の</sup>しらゆ支つもるらし  
ふるさとさむ久な利<sup>の</sup>まさるな利<sup>の</sup>是則  
ゆ支<sup>の</sup>ふれ八支<sup>の</sup>こと爾<sup>はな</sup>者那所<sup>を</sup>さ支爾<sup>ける</sup>い  
つれをむめとわきてをらまし友則

冰付春水

冰封水面聞無浪雪點林頭見有花。音

霜妨鶴唳寒無露、水結狐疑薄有冰。相如  
於本所<sup>は</sup>らのつき能<sup>ひ</sup>可利<sup>か</sup>のさむけれど可  
个みし美<sup>み</sup>つ曾<sup>ま</sup>つこほ利<sup>ける</sup>

水消見水多於地、雪霽望山盡入樓。白

水消漢主應、凝<sup>の</sup>勒<sup>の</sup>雪盡梁王不召枚。尊敬  
胡塞誰能全使節、呼沱還恐失臣忠。相規

やま可はのみ支はまされ利者る可せ爾  
多爾にこ本利者个ふやと久らん

霞

摩牙米簾聲々脆龍頸珠投鈍々寒。昔  
みや万爾はあられふるらしとやま那  
るまさ支能可つらいろつ支爾个利

佛名

香火一爐燈一盞、白頭夜禮佛名經。白  
香自禪心無用火、花開合掌不因春。昔  
あら多まのとしも久るれ者つ久利个む  
徒みも能こら須な利やしぬらん兼盛  
可所ふれ者わ可み爾つもるとしつ支を  
於久りむ可ふとな爾い所久らむ同人

昭和十二年四月一日印刷 定價金貳圓參拾錢

伊豫(下)

編輯者 東京市下谷區中根原町七二  
武田基一會

代賣者 東京市下谷區中根原町七二  
武田基一會

發行人 東京市下谷區中根原町七二  
武田基一會

印刷人 東京市下谷區中根原町七二  
武田基一會

黑川秀藏

東京市下谷區中根原町七二  
武田基一會

電 話 三五七七零

郵便東京六〇五四八零

發行所 東京市下谷區中根原町七二  
武田基一會

小立秋  
立秋  
立秋  
立秋



蕭颯涼風乍起  
誰教計會一時秋

旅泊故方秋色少  
野鶴高翔子吹聲微  
更上一層  
未得  
未得  
未得  
未得  
未得  
未得



但喜暑隨三伏  
不知秋送二毛來

早秋

槐花雨過新秋地相索風涼急夜云  
失景剩殘衣為重晚涼隨ら葉元えん

ありとぞういふともあればとゆむれ  
うあてこみゆすまくとも

七夕

持得事すうじ長なが乞巧きこう竹竿頭たけくわとう願ねがひめ白しら

二重にじゆう適定てきてい未み釣つる別陽べつよう便びん之根のね多文たぶん以ひ明願めいがん

驚涼風颸きりょうふうさい之參のさん

露痕しづか列はしら庭珠にわのじゅ乞ねが之參のさん林病りんびょう愁う寒かん苦く

凡院ぼんいん吟ぎん苦く愁う寒かん及およ明めい後ご之參のさん

ち衣き寒かん溫度おんと在あ渴か行ゆ煩惱ぼんのう候ま是ぜ苦く寒かん

因いん此こ處しょ望ま上じょう半はん明めい月げつ秋あき女め婢めい補ほ眠ま

ありのはと望まやまにあはいしき

一すよ一石とむじつれもすの  
あひもあひのすようふき

のりよすよけよねられまた  
すそけりやうわらう形を

### 秋興

林間後浦燒紅葉垂枝  
楚里時花重雨冷落葉秋月  
大底四時物若就中猶新是秋月  
物名に彷彿意宜泊然二年秋心  
已未感思在秋至多彷彿時若物章  
第一彷彿甲子之歲竹月乃望月以秋  
蜀秦涼玉浮花鳴鶯傳秋音多相  
うつりく

おもひと、まゆづり。秋風人  
あそけたるよしにけられ、まゆづ  
くまゆづのうすせん。たゆま

秋晚

相思夕上す。春立。蒼田。蝶。萬葉。秋  
望山。当月。移。秋。葉。聽。砌。泉。傳。信。亨。

をくらやまふ。よみ。これぞれ。す。千  
ほの。いみ。ゆ。あ。す。ゆ。れ

秋夜

秋夜長々無睡天不明秋て残焼宵望  
物萬々勝る打玄經  
豆し鐘漏動長夜耿し星の光暗天  
香。あ橘。千。萬。月。夜。秋。東。之。ぬ。ア。長。

幕方舟子露宿人にはたすきをも月のあ  
葦葭沙アシカサ裏孤舟夢榆柳營頃万里へ言名  
あしきのやまとりぬきのしたわを  
めたり、一よまとひじや、わわむ人丸  
むつとしましたてすくもあけづるわい  
ほはあよなうつとよよはれむ

十五夜

付月

秦甸之一千餘里凜々冰鋪漢家之三十

六宮澄々冰汎

彌鈔機す己翁相思之字榜不砧上  
俄渴蒸別々くあう二上十木夜使

三寒夜中那原色二年事か在人心

白

嵩山表裏千重雪海水高伍萬珠

白

十二廻中無勝於此夕之好予万里外皆爭  
於吾家之光

紀

碧浪金波三五初秋風計會似空虛  
自疑荷葉縠霜早人導蘆花遇雨餘  
岸白還迷柳上鶴潭能可更藻中魚  
移池波是那為是津夜清光可如如

淳若

金高一滴秋風露玉匣三更冷漢雲  
蓋三  
柳葉把酒處空一串里李夫人古漢曾傳  
みづれたもよてうづれたりみとつねよ  
れちくじゆうあきれもりうすわらう

月

誰人臘外久淹戎臣又庭前新別離

白

野屋

秋水汎東流夜收月影  
不醉黔中爭得磨圓山月正蒼々

統理年

天山不并何年雪含浦應迷舊日珠  
欲和豐嶺鐘聲否其奈暮亭鶴聲冷  
鄉渡數行征戎客棹歌一曲釣漁翁  
有子的是誰、わせけみれもううふ

中吉

まゆ、さのや、りよ、う、う、う、う、  
くも、はね、う、う、う、う、う、  
わけ、う、け、さ、み、ゆ、あ、き、み、よ、の、う、  
ま、ゆ、く、も、れ、わ、り、く、じ、し、す、れ、  
と、も、つ、き、に、い、く、と、い、う、く、ほ、ん、は、す、れ、

九日付菊

李詩

尋也社日辭家去菊酒重陽冒雨用

株故事於漢武則赤黃捕害人之木

易經記於觀爻而萸花也

先三連子以玄毛如曉星之精

引十子子而其氣趁秋毫之回

谷水洗花汲石流之滑上者三十餘

家地脈和朱食日精而狂年頑古亦

百箇歲

ややよしよくや らつゆけふよ  
いよたよりてふらうよもん夷

菊

霜蓬老驥三秋白露菊新花一半黃

白

不是花中偏愛菊此花開後更無花

元

嵐陰欲暮契松栢之後凋秋景早猶初

芝蘭之先吸

殘萬紀

魏材固皆淳厚陶家兒子不虛當

烹養自知無依舊

孫胤

蘭蕙莞嵐風搖壁後蓬萊洞月照霜中

董其昌

ひさうたのくもぐくよてみるきは  
あづくほくこうあやまたれけうめり  
くろあてうそくはやそんぱく  
せれかきよとけせうじくよくわざい

龜

九月盡

縱以靖幽為固難留蕭瑟於雲衢縱令

孟貴而追何處爽籟於風境

順

頭目縱隨襟裳乞以秋毫也太瘦誰

順

文峯栗鬱白駒景詞海艤舟紅葉赤

やまたさりりあよしももよとづくり  
もすよのはよとよだらうあそびし東  
もれでゆくあよのよよたとものを

わまとゆひのよよ不あううきを

女郎花

花色や遙栗俗呼爲女郎聞名誠

契偕老恐忘衰少首以書

順

をみりつておうううりやうせは  
あやなまちめいをやうしきつよ

笠森

さよりつゝよこゝはりとせ二万  
てとむうのあきふえます

清流

萩

曉霧庵<sup>アサヒノミツヤ</sup>花始後百般攀枝一時情  
あよの、にちようちよの、なほまし  
もねうやけやまのうけてうたむ、

うつはもよよくよあきはよ  
よきれわちわしたまつゆうし伊勢  
あよの、れもきの、うきよよよ  
うきよよよよよ

蘭

前項更有蘭條物有蘭衰葉ニ有氣

扶桑臺無影半浮雲掩而勑一昏暮慕景  
乞不弄亭株風吹而先收中書

疑如亂澤め頬施粉濁以錢人脂注珠赤  
也亦我亦アミ秋弦敲着シタマツ蟲鳴曉枕簟シタマツ  
やくらわしみよほづれあきのにに  
りつゆづけしふぢけすもじまた

槿

槿樹千章綠光槿花一日自為榮白  
來而不宿蓮塘有掛影シタマツ也宿焉シタマツ  
不逐槿綠シタマツ後常シタマツ花シタマツ  
大下シタマツりシタマツ一シタマツもあシタマツわシタマツれた  
ち下シタマツよみゆシタマツあさうシタマツのシタマツい

あせらうやまくいふはりとだらりともい  
じまとしばなもい、うそうそん 追てお

前裁

多見裁花悦目傳先時豫養待用遊自  
吾用家家儻僪春樹春裁秋草秋管三

閑思慕汝花紅日正月之常事休亂白時

曾此種予又思え竟か是花時代を学舊若  
ちわをすよまちくトとすおもふうち  
くようトわづかゆトこなづれもし形近  
きりよよわせめをふたわふトつゆ  
れたくよもいうトまんとまん

紅葉

不共紅葉青苔化又生深汎嘗焉

塵白

黃纈頰林寒空葉落瑠璃水淨玉汎

塵白

洞中清波瑠璃水底上苔陳珠猶林  
か物ねむね清色綠波多力猶にあ  
しりづのじーれも、じともくやま  
さきはのこじい、うつきよけわ多く

むら、れすよじふみうやまやま  
けうのもみくわ、ねまは

落葉

三秋而宮漏正長空階雨滴一万里而錦  
園何在落葉窓深

集賦

城柳宮槐湯桂落秋山か到夢人

白

秋庭不掃携藤杖同踏梧桐黃葉行

白

梧楸影中一聲之雨空灑鷓鴣背上數

片之紅繞殘

順

椎蓑徒反杖穿朱買臣之衣隱逸侵

遊履踏葛稚仙之藥

想

玉衣青衫是何年月每初教少澤林風

望

隨風落葉合蕭瑟賦石泉尋雅琴

順

亦有亦無、也下也上、人丸

之未つき、されど、もよ、もれいの

もれみはゆよ、それ

みゆもなきちわゆたるよみ

もみぢはよのうすむわける

鷹

甘帰鷹

万里人南春ち三秋秋原原の元元不も行行東月

滑滑よぬ同同ぬ

文生

湯湯湯に冬冬湖湖清清水水が羨羨秋秋あア有有引引來來  
利鷹

四客客東東山山極極雨雨ををあアニニりリ有有引引來來  
舊鷹

玄玄了了難難西西あア施施税税於於上上玄玄之之月月魚魚叢叢

茅茅乃乃生生稅稅木木於於下下茅茅魚魚相相

石石老老若若海海古古青青孤孤年年聲聲森森林林破破蘚蘚

重重木木芭芭朴朴居居中中鈴鈴风风檣檣溝溝湘湘江江上上草草

岸

あアきキいイそソよヨうウつツわワりリすスよヨうウいイるル  
うウつツたタかカつツたタとトかカ今今まマうウしシくク

支那

山腰帰鷹斜牽帶水面新虹未展巾あ幸

ちうしゆくとみもてゆくわ  
は、さくよせにすわだくへ仕房

虫

切る晴窓下喫く深草中秋天思婦心

雨夜愁人耳白

霜草欲枯虫思苦風枝未定鳥極難

床嫌短脚聲聲鬧壁狀空心亂孔穿

野直萍

山館雨時鳴自暗野亭風更織猶寒

直萍

荒島急遠風閉暗壁底冷幽月色寒

いまむざれよのけもあきれよま  
かねつまつむじてな

すわいすくまなよあよれよりう  
さくわいはれふまぞれつまた

鹿

萬葉抄清住庵寺紅葉於絶巒立森  
晴走き葉身身をこ夏更にか葉落風木  
しみちせわくよけのやまとすむ

温庭筠

うはおれなきてやあよき（  
ゆよくよとくわやうよ  
れこゑくらにやあよはくもん

鹿

可憐九月初三夜宿以高難身以う  
宿湯葉葉室空反夙御松梨霜無宿  
白  
善

さゝき／＼のあさ／＼をの／＼あまはきよ  
た／＼とみちまう／＼た／＼と／＼つゆ 家村

霧

竹霧曉龍銜嶺月蘋風緩送色江春

白

雅然夕霧挂人枕輕車期重出可鞍

賀

うはよわへふもひととこゝてたちやれ

ちふくようあよけやまはよけう集義文

すつためゆ／＼すれはうあよ／＼わべ

さほのや／＼こゝもくす／＼も支則

擣衣

八月九月正長夜千聲万聲無了時

白

如斗星前橫旅宿有櫻舟下桔亭未

莫

榜重又曉然。因月冷裁收秋。言々寒雲寒。  
裁出空空也。空空亦空空。空空也。若猶固。暮  
風應空空。雖是。被空月。子。林。萬。有。五。  
空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。  
空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。  
空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。  
空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。空。

冬

初冬

十月江南天氣好。可憐光景似春華。

日

四時牢落三空減。一方物蹉跎過半凋。

醉翻

床上卷收青竹簾。匣中取出白綿衣。

舊製

きづれふ小ゆのりめなすらす

冬夜

一盡寒枕重か夜數盡温耐雪中春

白

年光自向燈前盡客思従枕上生

幕

にもひうねいわうゆくはふゆのよ

けうきかせやもみぢよりたまきよわ

歲暮

寒流常月墜か鏡夕吹和霜利

いづ

白

風雪易向人前暮歲月難悅老底還道

良吉

ゆくとくはそくともしあうされよし  
うみうつけもへよれわとおりくま

爐火

萬物醞綠暗迎春  
更待帳紅燒色夜

未至空留子冬於此言流寒風岁被火也

是火煮後充枵取其末於夜月上也

是時脫破者月下不復如新就廢月有  
うつよひの月たよしひ月すよわ  
もくにくやう月ともわふわひ月葉平

### 霜

三秋岸雪花初白  
一夜林霜梨盡紅

溫庭筠

万物秋霜所壞色白時多日窮年

閨寒夢驚或添孤惄白上山深感動

先侵四皓白顧邊白

君子夜涼有少白年以候相尋白

あくにこの第二の鶴が初め高麗アラ  
晨櫻瓦薄鶴の文を表す事も鶴音歌也  
よをともすれさりすらはせ  
たゞけむしめんじめんやだるも

雪

曉入梁王之苑雪滿群山夜登庾公之

梯月明千里

白賦

銀河沙漲三千尺萬樹繁花排一萬株

白

雪以重毛充設氣人枝繁鬱立能仰  
天風之遙也極群鶴之毛之尚晴於  
子輕波而和之狹

白詩注

翅以清雅格有鶴心在矣其棕色人

白

上

立於庭上頸有鶴室左燭<sup>シロツブ</sup>手不离

若

班め重す秋扇<sup>アキイハシ</sup>を拂<sup>ハラフ</sup>し春<sup>ハサシ</sup>上<sup>アマ</sup>夜<sup>ヨ</sup>無<sup>ナシ</sup>

若

そや、こよはづく。ふうけゆまとよ  
ひ、やすよみや。いわく  
みづの、やまや、りゆつもづく  
すうせんじやもく、たわちやうなわき則

ゆふれ、よしよしれ、不<sup>ハ</sup>セ<sup>シ</sup>よけ<sup>ク</sup>、  
不<sup>ハ</sup>セ<sup>シ</sup>よ<sup>カ</sup>、をらか<sup>フ</sup>。ま

氷付看<sup>ル</sup>

冰封水面同玉良雪<sup>ヒカル</sup>頃見有花<sup>ス</sup>  
霜林<sup>シヤウリ</sup>詩<sup>シ</sup>處<sup>シテ</sup>空<sup>ムカシ</sup>露<sup>ムカシ</sup>水<sup>ムカシ</sup>相<sup>シ</sup>  
た<sup>シ</sup>下<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>おれひ、つかの<sup>シ</sup>も<sup>レ</sup>ば、

「みしもうまくほわけ」

わ消息水魚於地雪を雪も壁ふ古入橋白

冰清漢と夜絶音雪も葉も風也ふ古板さが

胡塞ごせは今使萬呼池よのき萬呼よのき萬呼よのき

やあつはのすはまたわらもう、そよ

のこりわらもうやこうえん

## 霰

塵じん牙が未被み輕けいし脆龍領珠投顆りゆう寒さむ

みやまはあれふちうさやよしり

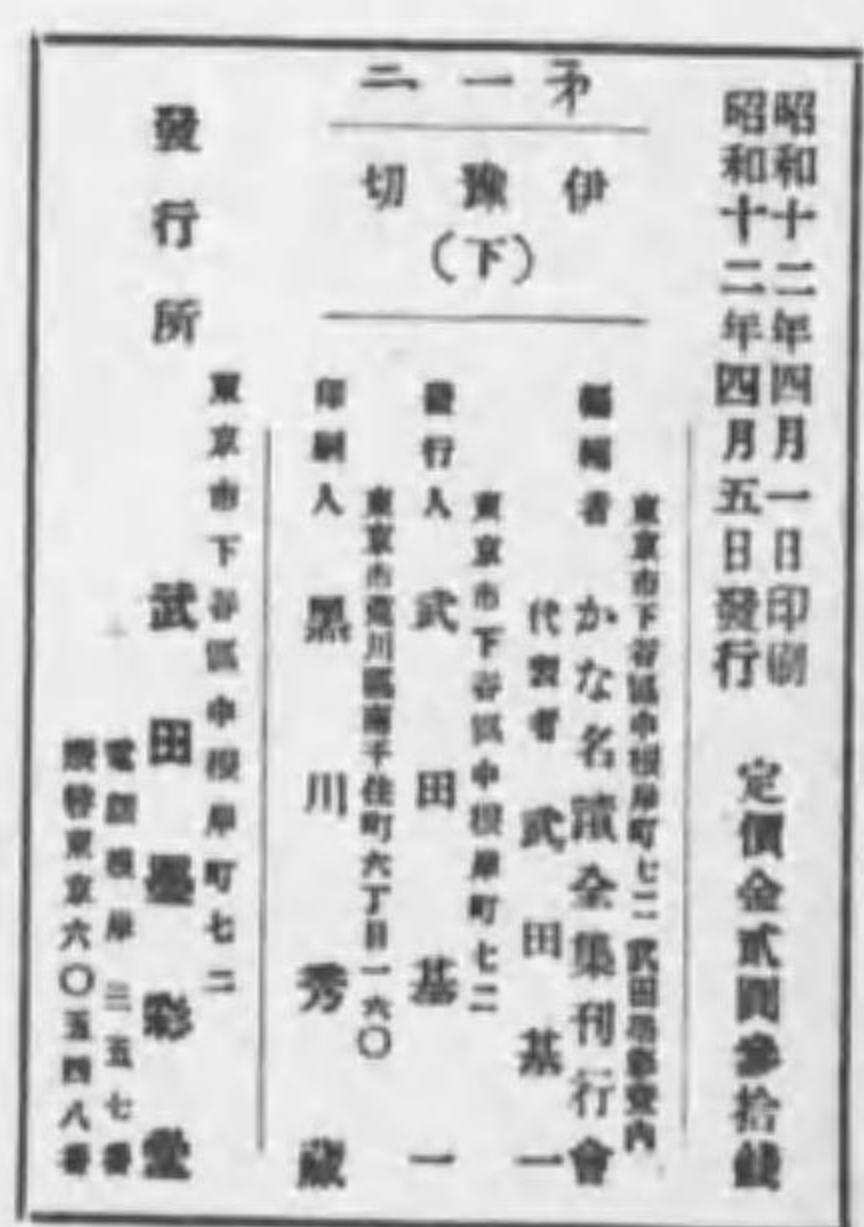
るまやまへ、うづくまよひや

## 佛名

香火一燈燈一き白政夜礼仏名禮

白

志自祥心音久花<sup>ハナ</sup>其<sup>シ</sup>因<sup>イニ</sup>  
有<sup>アリ</sup>ま<sup>リ</sup>ト<sup>モ</sup>くわ<sup>ル</sup>て<sup>ク</sup>わ<sup>ル</sup>  
ほ<sup>モ</sup>れ<sup>ヒ</sup>た<sup>モ</sup>や<sup>ク</sup>人<sup>ヒト</sup>  
う<sup>モ</sup>れ<sup>カ</sup>み<sup>ム</sup>く<sup>モ</sup>う<sup>モ</sup>う<sup>モ</sup>う<sup>モ</sup>  
た<sup>モ</sup>む<sup>カ</sup>よ<sup>ク</sup>な<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>く<sup>モ</sup>人<sup>ヒト</sup>



終

